大阪市立大学生活科学部紀要・第43巻（1995）

青年期後期における身体像と自己受容，他者受容との関係について

田場あゆみ・倉戸ヨシヤ

Study on the body image and acceptance of self and others on the late adlescence

AYUMI TABA and YOSIYA KURATO

序論

1．はじめに

身体は，James (1890) 以来，自我或いは自己の重要な部分として，或いはその発達の核になるものとして考えられている(柴田，1990)。自分というものを問題とする時，身体は重要な位置を占めると言えよう。

ところで，青年期の大まかな特徴は，思春期がいずれかといえば心理・生物学的な規定要因が強いのに対し，心理・社会的な規定要因が強い時期と捉えることができる。青年期においては，存在世界の中で「他ならぬ自己」を意識し同定していかねばならない，体験主体としての自己の問題が重要だと思われる。

一般に青年期は前期，中期，後期にわけられる。青年後期（late adlescence）とは17歳前後から22歳前後（高校後半から大学時代）を指す。精神分析学的理解においては，青年期後期では新たに出現してきた様々の自我機能を統合し，人格にまとまりと連続性と不変的構造とを形成することが中心的な課題になるという。この仕事は中期から始められているが，後期はその最終的な仕上げの時期であると言われている。また，青年期は身体発育が本人に自覚的に経験され，自分の身体像(body image)の形成という新しい問題に直面する。故に自己の身体をどのように認知し，評価するかということが最も重要(柴田，1990）だと考えられる。そして，身体と自己の関わりを強く意識すると同時に，対人関係の拡大を経験する時期でもあることから，青年期後期における身体像，自己，他者との関係を研究することは有意義だと思われる。

2．身体像（body image）の定義

身体像（body image）の研究は脳病理学から始まり精神病理学や心身医学の領域にまで至っている。研究者により術語の用い方に若干の相違はあるが，身体知覚(body perception)，身体概念(body concept)，身体意識(body corporeal(awareness)）などの術語も身体像とおおむね同じ内容を表している（小出，1976）と言われている。これは，脳病理学者であり，精神分析学にも精通したSchilder(1935)が使い始めた概念であるが，彼は身体像を「我々が我々の心の中で形成する我々自身の像(picture)であり，身体の自己現出（self-appearance）である。それには心像や表象が深く関わっている」と述べている。またSmythies（1953）は，身体像を「視覚的，心的ないし記憶心像であり，体験されるべきものである」と定義しているが，それは「身体の意識の中へのあらわれで常に変化する心像」(Federn, 1953)とも言えるであろう(増補版精神医学事典，1985)。

簡単に述べると身体像とは「個々人が自分自身の身体について持っている心像(image)」（小野，1987）と考えられる。さらに詳しく見ていくと，Fisher(1970)は，「身体は他の何ものよりも自分に心理的に近いので（自己同一性や存在そのものから切り離すことができないほど），自分の関心や欲求をありのままに投影する特別あつらえのスクリーンの役を果たす」と述べている。また野辺地（1972)は，「各個人が空間的に自分自身の外貌についてもっている心像であって，それは身長，体重，体格，容貌，毛髪，眼，皮膚など身体のあらゆる部分にわたって存在するものである」としている。

忠井（1994）は，「『胸のかたち』，『脚のかたち』などの身体外表面の表す体型的イメージだけでなく，『心臓のはたらき』など体内に存在する内臓の機能イメージ，ま

た『足の力』といった身体の動的イメージ，さらに『健康』など自己の身体と密接に関連する概念的イメージをも内包するものである」と定義している。

3．自己受容（acceptance of self），他者受容（acceptance of others）の定義

個人の自己意識（対象としての自己及び自己の行動に関する知覚や，それに対する態度，感情，評価）は，他者を認知する時に大きな影響をもつと思われる。

他者を認知する際，ありのままの事実を歪めることなく受け入れ知ろうとする構えと，自己自身を受け入れる態度が結びついていることを示しているのが，自己受容と他者受容の関係であると言えよう。また，受容は自己及び他者に対する態度を決める最も基本的な個人の構えと考えられる。

Maslow (1954) は，健康な人間は自分自身やその性質を無念さや不平を感じずに，また，その問題についてあまり深く考えることなく受け入れることができると述べている。さらに健康な人間は欠点をすべて認めた上で，理想の姿とは食い違っていることを承知しながらも自身の人間性を受け入れることができると述べている。

自己受容とは臨床心理学的には「ありのままの自己を評価することなく，あるがままに受け入れること」と言えよう。Sheerer (1949) は，自己受容を「自分自身の感情，動機，社会的及び個人経験を基本的な感官的素材(the basic sensory data)を歪曲することなしに知覚すること」と定義している。またRogers (1959) は「クライエントが価値ある1人の人間として非難よりもむしろ尊敬に値するものとして自分自身を知覚すること」，「自分の基準を他人の態度や願望に基づいたものとしてではなく，むしろ自分自身の経験に基づくものとして知覚すること」と定義している。

Rogers (1951) は，他者受容については，その概念は厳密に言えば知覚的概念ではないけれども，たくさんの知覚的要因が含まれていると述べている。まず第1に他人を価値のある人間として，基本的な人間性をもつものとして知覚する度合，第2に自分自身の意見，信念，価値観および行動基準をもつ権利のある人として他人を知覚するということ，第3に独立した，自己指示的な人間として他人を知覚するということが含まれているとしている。また，Berger (1952) はSheererの20の自己受容の定義と10の他者受容の定義を要約，修正し，自己受容を9つの視点，他者受容を7つの視点から定義している。以下にそれを示す（訳は吉田・澤野・服部(1992)による）。

a．自己受容の定義—「自己受容する人は，」

(1) 自分の行動のガイドとして，外部の圧力よりも自己の内面における諸価値や諸基準を，最も基本的なものとして信頼する。
(2) 人生を生きぬいていく自分の能力を信頼する。
(3) 自分自身の行動の結果に責任を負い，そしてそれを受け容れる。
(4) 他人からの賞賛や批判を客観的に受け容れる。
(5) 自分自身について見い出す感情，動機，限界，能力，望ましい性質を否定したり，歪曲しようとしないで，むしろ，自己非難することなしにすべてを受け容れる。
(6) 他人と同じ水準で自分自身を価値ある一人の人間だと思える。
(7) 自分を拒否する何らかの理由を他人に与えようと与えまいと，他人が自分を拒否することを予期しない。
(8) 自分自身を，他人と全く違っているとか，「変わり者」だとか，自分の反応において概して異常だとか，みなさない。
(9) 内気でも，自意識過剰でもない。

b．他者受容の定義—「他人を受容する人は，」

(1) 他人の行動や基準が自分自身のもつものと相反していると思える時でも，他人を拒否したり，憎んだり，否定的な判断を下さない。
(2) 他人を支配しようとしない。
(3) 他人のために責任を負おうとしない。
(4) 他人の価値を否定しないし，人間として他人が自分と平等であることを否定しない。ただし，このことは，特定の業績については，平等だということを意味するわけではない。自分が出会う人々に対して優っているとも劣っているとも感じない。
(5) 他人の役に立ちたいという強い願いを示す。
(6) 他人に旺盛な興味を持ち他人とお互いに満足のいく関係を築きたいという強い願いを示す。
(7) 自分自身の幸福の向上を図ろうとするときに，他人の権利を侵害しないように気をつける。

4．先行研究について

(1) 身体像に関する先行研究

身体像についての心理学的研究は，Secord & Jourard (1953) に始まる。彼らは自ら考案したBody-cathexis scale（身体部位に対する満足度評定）とSelf-cathexis scale（自己概念の成熟を示す）を使用した研究から，身体についての感情と自己についての感情は高い正の関係にあることを見出した。大石 (1983) はこのスケールを参考にした尺度を使用して，大学生において男子が女子より有意に身体満足度が高いという結果を見出している。

また，柴田（1990）は青年を対象として，身体満足度と対人不安及び自己開示行動の様式の関係について研究しているが，身体満足度が低い者は，高い者と比べて対人場面において不安や緊張を感じると述べている。秋山，藤本（1990）は，身体像を正確に認知する者（理想身体像と現実身体像との関連において）は，適応性が高く，対人関係場面における自己の柔軟性と関連づけられることを示唆している。

(2) 自己受容，他者受容に関する先行研究

自己受容と他者受容に関する研究では，前者が増大すると必然的に後者も増大するものであると，Fromm（1939），Rogers（1949），Maslow，Horney（1937）等によってすでに論じられてきている。また先述したBergerは主に大学生を対象にして自己受容と他者受容の関係を検討し，両者の間に正の相関を見出しており，Phillips（1951）も同様の結果を得ている。Sheererは，クライエント中心療法において生起する自己受容と他者受容の変化について研究している。彼女は10のカウンセリング・ケースを用いて研究しており，その始まりから終結までの間に測定された限りの自己受容および自己尊重は，かなり規則的な上昇を示し，他者受容もまた，始まりから終結までの間に顕著ではあるが，いささか規則的でない上昇を示したと述べている。

Stock（1949）の研究がさらに明らかにしていることは，他者受容，他人に対する感情，他人知覚などが，自己受容，自己についての感情，自己知覚などの度合いと正の有意な相関関係をもっているということである。

適度に自己受容している人は対人関係が円滑に進められ，他者を受け入れることができる（加藤，1977）という。これらの研究は，自己受容することが，積極的で良好な対人関係の構築に寄与することを明らかにしていると思われる。

(4) 身体像と受容性に関する先行研究

藤岡（1989）は，高校生を対象にして身体像と自己受容の関係について研究している。高2男子は身体満足度と自己受容との関連性が弱く，身体についてのこだわりが必ずしも否定的な自己認識に結びついていなかったという。一方，女子は全体的に身体についてのこだわりが自己概念に影響を与え，あるがままの自己認識が困難になると考えている。

また，伊原（1992）は，中学生，高校生，大学生，社会人を対象に身体像と自己受容，自己肯定感，共感性の関係について横断的に研究している。自己の身体側でのイメージの肯定感が精神の側で捉えた自己の肯定感と関連していること，身体像と他者への共感性が関係していること等が示唆されている。また，どの年齢段階においても身体に対する肯定感が自己に対する肯定感の基礎であり，また自己の身体が他者理解の基盤になると述べている。

目的

これまでの研究では，身体像の満足度は性差が認められ，身体像の満足度と自己受容，また自己受容と他者受容との関係については正の相関あることが認められている。しかし，身体像の満足度と他者受容との関係についての研究はほとんど見当たらない。そこで筆者は，身体像の満足度と他者受容の関係を捉えたいと思う。青年期の自己は常にその背後に身体を裏づけとしてもっていると考えられている。この意味で身体は，自己のシンボルであると言えよう。また，身体は自己を最も具体的に自他に示すものであり，他者によって直接見られ触れられる社会的対象でもある（上野，1975；野辺地，1964）と言われている。従って身体像は，社会的自己の最も具体的な部分であると捉えることができ，その人の対人関係のあり方に影響を及ぼすものと考えられる。身体が自己の一側面であるなら，身体と他者との関係は，「形あるものである他の諸存在への接近と親和の契機」(市川，1975)となり，身体を通して我々は他者を理解できる（伊原）と思われる。

以上を踏まえると，身体が「自己」の一部分であることと，自己受容と他者受容との間に相関関係があることから，身体像の満足度と他者受容においても相関関係が成り立つと思われる。

また本研究において使用する「自己・他者受容尺度」は，その妥当性測定にあたり吉田らは「自己について対象化，及び概念化ができ，自分自身の存在の意味や価値について自分なりにはっきりさせることができる」ことを前提にし，調査対象を「相対的に自己意識の形成を果たしていると考えられる4年生大学3回生以上」としているが，1・2回生と3・4回生を比較した結果は出されていない。よって，本研究では，1・2回生と3・4回生との受容性の比較検討も試みたい。

本研究は以下の仮説を検討することを目的とする。

(1) 身体像の満足度は先行研究と同様に性差が認められるだろう。

(2) 身体像の満足度と他者受容には正の相関関係があるだろう。

(3) 1・2回生と3・4回生とで自己受容，他者受容に何らかの違いが見出せるだろう。

方法

1．対象

対象者は，大学生352名（男子191名，女子161名）である。対象者の平均年齢は，20.9才で，その範囲は18才から24才までであった（表1）。

表1　対象者の概要

	男子	女子	全体
1・2回生（人）	82	61	143
3・4回生（人）	118	110	228
年齢の範囲（才）	18～24	18～23	18～24
年齢の平均	21.1	20.5	20.9
年齢のSD	1.72	1.20	1.53

2．実施期間

調査は，1994年11月から12月に実施した。質問紙に回答を自己記入させ，その後回収した。

3．質問紙

質問紙は自己身体イメージテスト，自己・他者受容尺度という順に構成した（表2，3を参照）。

a．自己身体イメージテスト（Self Rating Body Image Quetionnaire：SRBI）

忠井ら（1992）は，Berscheid & Hohnstedt（1973）の身体イメージ検査と葉賀ら（1986）のbody image testを参考にして，身体各部位の形態，機能あるいは身体イメージに関連すると思われる概念などを表す項目を選択している。続いて，対象者の一般的理解度を考慮しつつ，難解であると思われる項目については平易な用語に改めた後，予備調査を行い修正を経て最終的な項目を決定したという。

このテストは，自己の身体に関する外表各部位の形態イメージ，臓器の機能イメージ，身体の運動イメージ，及び身体イメージに関連すると考えられる年齢，健康などのイメージの満足度を尋ねる質問40項目で構成されている。評定は1（不満）から5（満足）までの5段階となっている（表2）。

b．自己・他者受容尺度（Acceptance of Self and Others Scale）

Bergerは「自己受容」に関する9つの定義と「他者受容」についての7つの定義に基づいて，Acceptance of self and others scaleを作成している。これは2つの下位尺度から構成されている。しかし吉田らは，彼の尺度は観念的・抽象的な項目が多く，具体性に欠けると問題点を指摘し，新たな尺度を作成した。まずBergerの尺度について大学生を対象に予備調査を行い，妥当性のない項目は省き，被調査者から理解しにくいと指摘のあった項目については，一部翻訳を修正した上で，最終項目として用いている。また，彼の定義に基づいて大学生の対他者関係において，観念でなく，日常の具体的行為として表出する自己・他者の受容を測定する項目が必要と考え，独自の質問項目を作った。その際，定義として，Bergerの自己受容の定義の中から「他者による評価の客観的受容」，他者受容の定義の中から「自己と相異なる基準をもつ他者の受容」を採用している。そして，この2つの尺度を合わせて「自己・他者受容尺度」とした。なお，項目の順番は筆者がランダムに構成した。

この尺度は36の短文の項目からなり，2つの下位尺度—自己受容尺度（18項目），他者受容尺度（18項目）に分かれる。評定は1（全くあてはまらない）から7（全くあてはまる）までの7段階となっている（表3）。

結果

1．結果の処理

データ解析には統計計算ソフトＳＰＳＳ—ＰＣ版（大阪市立大学生活科学部所属）を用いた。結果は，各尺度の項目の合計点を指標として捉えていきたい。

a．身体満足度得点

自己身体イメージテストの項目評定点の合計を「身体満足度得点」とする。得点が高いほど身体満足度が高いことを表す。評価点は40点から200点の間に分布する。

b．自己受容得点

自己・他者受容尺度の下位尺度である自己受容項目評定点の合計を「自己受容得点」とする。得点が高いほど自己受容が高いことを表す。評価点は18点から126点の間に分布する。

c．他者受容得点

自己・他者受容尺度の下位尺度である他者受容項目評定点の合計を「他者受容得点」とする。得点が高いほど他者受容が高いことを表す。評価点の分布は自己受容得点と同じである。

d．受容全体得点

自己受容得点と他者受容得点を合計したものである。評価点は36点から252点の間に分布する。得点が高いほど受容性全体が高いことを表すが，自己受容が高いか，他者受容が高いかを表すことができないのが限界点である。

各得点の統計結果を述べていく際，便宜上「合計点」と称することにする。

なお，自己・他者受容尺度の項目のうちJ1，J3，J4，

表2

Ⅰ．以下の40項目について、今のあなたのイメージに最も近いと思うものを1から5までの5段階のうちから選んで、各項目ごとに番号を○で囲んで下さい。

	1 不満	2 やや不満	3 普通	4 やや満足	5 満足
1）年齢	1	2	3	4	5
2）身長	1	2	3	4	5
3）眼のかたち	1	2	3	4	5
4）おしり（ヒップ）のかたち	1	2	3	4	5
5）腕	1	2	3	4	5
6）膝（ひざ）	1	2	3	4	5
7）脚のかたち	1	2	3	4	5
8）体のつくり（プロポーション）	1	2	3	4	5
9）肝臓の働き	1	2	3	4	5
10）口唇（くちびる）	1	2	3	4	5
11）肺のはたらき	1	2	3	4	5
12）脳のはたらき	1	2	3	4	5
13）筋肉の力	1	2	3	4	5
14）胸（バスト、乳房）	1	2	3	4	5
15）神経のはたらき	1	2	3	4	5
16）あご	1	2	3	4	5
17）鼻のかたち	1	2	3	4	5
18）食べ物の消化	1	2	3	4	5
19）体のスタミナ（体力）	1	2	3	4	5
20）体毛（毛の分布）	1	2	3	4	5
21）耳のかたち	1	2	3	4	5
22）横顔	1	2	3	4	5
23）排泄（尿や大便）のはたらき	1	2	3	4	5
24）後ろ姿	1	2	3	4	5
25）顔	1	2	3	4	5
26）顔色	1	2	3	4	5
27）足の力	1	2	3	4	5
28）分泌腺（汗、唾液腺）のはたらき	1	2	3	4	5
29）頭髪	1	2	3	4	5
30）手	1	2	3	4	5
31）声	1	2	3	4	5
32）健康	1	2	3	4	5
33）腰（ウエスト）のかたち	1	2	3	4	5
34）心臓のはたらき	1	2	3	4	5
35）体重	1	2	3	4	5
36）肩のかたち	1	2	3	4	5
37）歯	1	2	3	4	5
38）姿勢	1	2	3	4	5
39）皮膚	1	2	3	4	5
40）首	1	2	3	4	5

［自己身体イメージテスト（忠井ら、1992）より］

表3

Ⅱ．以下の36項目について、今のあなたに一番ぴったりするところを1から7までの7段階のうちから選んで、各項目ごとに番号を○で囲んで下さい。

	1 全くあてはまらない	2 かなりあてはまらない	3 ややあてはまらない	4 どちらでもない	5 ややあてはまる	6 かなりあてはまる	7 全くあてはまる
1）誰か知っている他人が一人で何かを成し遂げるのに困っていたら、何をしたらよいかを教える。	1	2	3	4	5	6	7
2）人の物の見方が自分と違っても、頭から拒否せずその人の考え方を尊重する。	1	2	3	4	5	6	7
3）人生において自分の望むことを得るのに助けになるなら、少しぐらいほかの人の感情を害してもよいと思う。	1	2	3	4	5	6	7
4）あまり自分を普通だと思えないので、自分を普通だと感じたい。	1	2	3	4	5	6	7
5）どんな時でもどんな人といても、なんだか自分自身について半信半疑である。	1	2	3	4	5	6	7
6）親しい他人が決定を下すのに困っていたら、どうしたらよいかを教える。	1	2	3	4	5	6	7
7）間違いだと自分が考えるようなことをする人でも、仲良くやっていける。	1	2	3	4	5	6	7
8）親の考え方に同意できなくても安心させたいので、親の考え方に沿うような生き方をする。	1	2	3	4	5	6	7
9）他人と言い争いになると、その人に対していらいらしやすい。	1	2	3	4	5	6	7
10）親しい他人の意見を正しくないと思うときでも、その人との関係をまずくしたくないので反論をひかえる。	1	2	3	4	5	6	7
11）自分がどんな人と出会う場合でも、自分をその人より人間として優れているとも劣っているとも思わない。	1	2	3	4	5	6	7
12）自分に対して何か批判があったり誰かが何かを言ったりすると、それを受け容れることができない。	1	2	3	4	5	6	7
13）家族に自分のしたいことについてとやかく言われても、うるさがらず家族の考え方をよく聞き理解しようとする。	1	2	3	4	5	6	7
14）大勢の人たちの中では間違ったことを言うのをおそれるので、たいていあまり話さない。	1	2	3	4	5	6	7
15）たとえほかの人が自分を疑っているときでも、人間として自分の価値を疑わない。	1	2	3	4	5	6	7
16）大勢の人の前ではとても内気になるので、自意識過剰になってしまう。	1	2	3	4	5	6	7
17）生活の中である人たちについていろいろな感じ方を持つことがあるが、その人たちに対して悪いなという気がしてならない。	1	2	3	4	5	6	7
18）他人があとで何か良いことをしてくれるのでなければ、他人のために何かすることにはあまり利点があるとは思わない。	1	2	3	4	5	6	7

	1 全くあてはまらない	2 かなりあてはまらない	3 ややあてはまらない	4 どちらでもない	5 ややあてはまる	6 かなりあてはまる	7 全くあてはまる
19）親の考え方は気に入らないので、一方的に非難したり反発したりする。	1	2	3	4	5	6	7
20）親の物の見方が時代遅れだと思っても、親を非難したりばかにしたりしない。	1	2	3	4	5	6	7
21）誰といてもどんな時にも、よく劣等感に悩まされる。	1	2	3	4	5	6	7
22）将来何か問題が起こったとしても、何とか対処していけるという自信がある。	1	2	3	4	5	6	7
23）地位の高い人から低い人までどんな人たちと一緒にいても、気にしないで振る舞える。	1	2	3	4	5	6	7
24）最後には自分のことは自分で解決するしかないのだから、他人のことをめったに心配しない。	1	2	3	4	5	6	7
25）親しい他人に自分の意見を批判されると、その人の意見には耳もかさず自分の意見ばかり押し通す。	1	2	3	4	5	6	7
26）親しい他人に自分のしたことや考え方を批判されても、無視せずその人の意見をよく聞き理解しようとする。	1	2	3	4	5	6	7
27）家族に自分のしていることが認められないと、安心してそれに取り組めなくなる。	1	2	3	4	5	6	7
28）自分のしている「しごと」に夢中になれるので、親しい友達がいなくても悩むようなことはない。	1	2	3	4	5	6	7
29）自分をほかの人と同じレベルだと感じているので、そのことが人と良い人間関係を築くのに役立っている。	1	2	3	4	5	6	7
30）人に対していろいろな感情と衝動をもっているけれど、それをごく自然なものとして認められる。	1	2	3	4	5	6	7
31）自分のまわりの何人かの人たちと親しく交わるよりも、むしろ一人でいる方が好きだ。	1	2	3	4	5	6	7
32）人に誤解されるようなことがあっても、その人の人生に重大な影響をもたらすような過ちをさせないように努める。	1	2	3	4	5	6	7
33）何か自分の重要な目的を成し遂げようとしている時、ほかの人の感情をたいてい無視する。	1	2	3	4	5	6	7
34）人間としての価値を持っている自分を他人が嫌うような理由など何もないと思うので、見知らぬ人たちともこわがらずに会える。	1	2	3	4	5	6	7
35）たとえよく知らない人たちのためでも、ちょっとした親切をするのが楽しい。	1	2	3	4	5	6	7
36）家族に自分の判断で決めたことを批判されると、いらいらして自分の意見ばかり言い張る。	1	2	3	4	5	6	7

［日常意識尺度（吉田ら、1992）より］

御協力有り難うございました。

J5, J6, J8, J9, J10, J12, J14, J16, J17, J18, J19, J21, J25, J27, J31, J33, J36は逆転項目として処理した。これは，文意がnegativeに解釈される項目のため，得点が高くなるほど受容性が高くなるように修正するためである。また本研究における「学年別」とは2学年ずつまとめたもので，「1・2回生」，「3・4回生」とする。

2．信頼性

信頼性をCronbachのα係数で算出したところ，自己身体イメージテストは$\alpha=0.91$，自己・他者受容尺度は$\alpha=0.79$，となり，信頼性は満たされていると言えるだろう。

3．身体満足度得点の平均値の差の検定

身体満足度得点についてt検定を行ったところ，身体満足度得点において性差が認められた。男子の方が，女子より身体満足度得点は高いと言えるだろう（0.1%水準）。なお，学年差は認められなかった（**表4**）。

表4　身体満足度得点のt検定の結果（性別）

得点名		男子	女子	t値／df
身体満足度得点	平均値	117.2	109.2	3.93***
	SD	20.1	17.8	350
	N	191	161	

*** P<.001

4．各合計点の無相関検定

(1) 性別による無相関検定

性別に各合計点の相関関係を調べたところ，以下の結果が得られた（**表5**）。

男女とも身体満足度得点と受容全体得点との間に正の低い相関が認められた（男性0.1%水準，女性1%水準）。また，受容性の下位尺度で見ていくと，男子は自己・他者受容得点とも身体満足度得点と，また自己受容得点と他者受容得点とに正の低い相関が認められた（ともに0.1%水準）。女子は，身体満足度得点と自己受容得点，自己受容得点と他者受容得点とに正の低い相関が認められた（ともに1%水準）。

表5　各合計点の無相関検定の結果（性別）

得点名	男子（N=180）	女子（N=151）
身体満足度得点－自己受容得点	0.37***	0.30***
身体満足度得点－他者受容得点	0.24***	—
自己受容得点－他者受容得点	0.30***	0.20**
身体満足度得点－受容全体得点	0.39***	0.24**

** P<.01
*** P<.001

(2) 学年別による無相関検定

次に学年別に無相関検定を行ったところ，以下の結果が得られた（**表6**）。

3・4回生においては，身体満足度得点と自己受容得点，他者受容得点において正の低い相関（0.1%水準）が，また1・2回生においては，身体満足度得点と自己受容得点（0.1%水準），身体満足度得点と他者受容得点との間に正の低い相関が認められた（1%水準）。

表6　各合計点の無相関検定の結果（学年別）

得点名	1・2回生	3・4回生
身体満足度得点－自己受容得点	0.32***	0.37***
身体満足度得点－他者受容得点	—	0.24***
自己受容得点－他者受容得点	0.23**	0.26***
身体満足度得点－受容全体得点	0.25**	0.39***

1・2回生 n＝134、3・4回生 n＝197

** P<.01
*** P<.001

5．身体満足度H－L群による自己受容，他者受容得点の平均値の差の検定

(1) 性別身体満足度H－L群による自己受容，他者受容得点の平均値の差の検定

男女ごとに身体満足度得点の高得点者，低得点者をそれぞれ25%抽出し（H群，L群とする），自己・他者受容得点の平均値の差を検討した。その結果，男子は身体満足度得点の高い者は，身体満足度得点が低い者より自己・他者受容得点とも高く（0.1%水準），女子は身体満足度得点が高い者は自己受容得点が高く（1%水準），他者受容得点は高い傾向（10%水準）が認められた（**表7**）。

(2) 学年別身体満足度H－L群による自己受容，他者受容得点の平均値の差の検定

次に，学年別に身体満足度得点の高得点者，低得点者をそれぞれ25%抽出し（H群，L群とする），自己・他者受容得点の平均値の差を検討した。その結果，3・4回生は身体満足度得点の高い者は，身体満足度得点が低い者より自己受容得点（1%水準），他者受容得点とも高く（0.1%水準），1・2回生は身体満足度得点が高い者は自己受容得点が高く（1%水準），他者受容得点は高い傾向にある（10%水準）と言えるだろう（**表8**）。

6．自己受容，他者受容得点の平均値の差の検定

自己受容・他者受容得点についてt検定を行ったところ，性差は認められなかったが，学年差は認められ3・

表7　身体満足度得点のH群—L群による自己受容，他者受容得点のt検定の結果（性別）

得点名		男子 H群	男子 L群	女子 H群	女子 L群
自己受容得点	df／t値	93	3.88***	79	3.14***
	平均値	80.7	69.3	77.5	69.3
	SD	13.2	15.4	10.8	12.7
他者受容得点	df／t値	83.5	3.38***1)	69.6	1.84**1)
	平均値	82.7	74.7	81.7	77.6
	SD	9.6	13.3	11.9	7.9
受容全体得点	df／t値	93	4.62***	79	3.44***
	平均値	163.5	144.0	159.2	146.9
	SD	19.6	21.4	16.6	15.8

1) 2) Welchの検定

男子　H群n＝48、L群n＝47

女子　H群n＝41、L群n＝40

* P<.10

** P<.01

*** P<.001

表8　身体満足度得点のH群—L群による自己受容，他者受容得点のt検定の結果（性別）

得点名		1・2回生 H群	1・2回生 L群	3・4回生 H群	3・4回生 L群
自己受容得点	t値	3.19**		3.87***	
	平均値	75.6	66.3	81.8	71.9
	SD	10.8	13.8	12.6	13.6
他者受容得点	t値	1.90*		2.52**	
	平均値	78.9	73.4	82.2	77.8
	SD	11.9	12.8	9.5	8.6
受容全体得点	t値	3.34***		4.16***	
	平均値	154.5	139.7	164.0	149.7
	SD	17.4	20.0	18.6	16.7

1・2回生　H群n＝38、L群n＝33、df＝69

3・4回生　H群n＝54、L群n＝52、df＝104

* P<.10

** P<.01

*** P<.001

4回生の方が1・2回生より自己受容得点（0.1%水準），他者受容得点（1%水準）とも高いと言えるだろう（**表9**）。

考察

1．身体満足度について

表9　自己受容，他者受容得点のt検定の結果（学年別）

得点名		1・2回生	3・4回生	t値／df
自己受容得点	平均値	71.0	76.0	3.63***
	SD	11.9	13.0	346
	N	142	206	
他者受容得点	平均値	76.5	79.6	2.75**1)
	SD	10.9	9.4	268.6
	N	140	205	

1) Welchの検定

** P<.01

*** P<.001

身体満足度得点は，女子は男子より有意に低い値を示した。このような性差がどの時期から生じるのか。忠井ら（1993）の発達的に行った研究によると，小学校4年時には男女ともほぼ同じレベルの身体像をもっているが，中学校1，2年時になると性差が認められるという。つまり，身体像は男女とも10才前後に大きな変容を認め，それ以後少なくとも思春期までは変動しないということであろう。この時期はいわゆる第2次性徴の時期にあたり，特に女性では体型も丸みをおび，心身ともに著しい変化が認められる時である。また，身体像の変化はネガティブな方向に男女とも変化するが，特に女子において著明であったという。従って，女性にとってこの時期の身体的変化が身体像認知の評価に大きく関わっているものと推定される。これは，摂食障害は圧倒的に女子に多いということにも関連があるように思われる。男子の身体満足度が相対的に高かったことについては，「男子の場合，青年期後期にはいれば課題ははっきり肉体から自分の生きざまへとうつる（笠原，1977）」ことと関係があるのかもしれない。また，身体満足度において学年差が認められなかったのも，青年期後期におけるわずかな年齢差よりも，それ以前の思春期，或いは性差が身体像には問題になると思われる。

2．自己受容と他者受容について

自己受容，及び他者受容においては有意な性差は認められなかった。また，自己受容得点より他者受容得点の方が平均値が高いという結果は性，学年を問わず見られた。Berger，服部らは女性の方が自己受容得点より他者受容得点が高い傾向を見出しており，本研究の結果は先行研究の結果とは異なるものである。今回性差が認められなかったのは，日本の社会においては自己主張せず他者に同調する傾向があるが，それが他者受容得点の高さとなって表れていると推測される。

性差は見出されなかったが，自己受容，他者受容の両得点において学年差が認められた。いずれも3・4回生が1・2回生より得点が高かった。これは序章において述べたように「1・2回生より3・4回生の方が自己についての対象化，及び概念化，存在の意味や価値についてはっきりさせることができ，自己意識の形成を果たしている（吉田ら，1992)」と考えられる。

加藤（1977）は，自己受容度が男子において中学，高校，大学という年齢発達に伴ってU字傾向になるのに対して，女子では下降傾向になることを明らかにしている。また梶田（1980）は，女子の場合，中学，高校となるに従って自信や自己受容よりも他者のまなざしの意識が上回ってくると述べている。

これについては，「適度に自己受容している人は，自己への信頼感が他者への信頼感につながり，これがその人の他者への肯定的態度の基盤になっているのではないか。（田中，1988)」，「自己受容性は，他者を自己と同一視する機能をもっているのではないか。そのため，自己受容している人は，他者に対しても受容的になるのであろう。（式部，1983：岩下，1988)」，「自己受容している人は，自己探究から解放される，それに伴い，自己の外側に関心を向けることができるようになる。(Walter，1977)」ということを支持するものと思われる。

Fromm (1947) は，近代文化においては，自己自身に対する愛は利己主義と同義であり，他人への愛とは矛盾すものであるという考えが存在することを述べ，その誤りを強調した。彼は，「自己への愛と他人への愛が互いに両立しない，二者択一的な問題として扱われるのは本来矛盾したことである。人間としての自己自身の成熟と独自性の尊重は他人への尊重と理解から切り離せない。自己自身に対する愛と他人に対する愛は不可分離に結びついている。自己を愛することのできない人は他人を愛することができず，自己拒否は他の個人や集団に対する敵意の要因として作用する」と述べている。

今日，自己受容性は生きていることを実感し，自己のもてる能力を発揮している状態である心理的健康の指標の1つに数えられている（Jahoda，1958：土田，1969)。しかしながらその一方で，極めて高い自己受容(過剰自己受容）状態にある人は，適度な自己受容状態にある人と比べて，必ずしも良好な対人関係をとることができないことも指摘されている。これは，過剰自己受容は，自己不信に対する防衛的態度のあらわれであり，必ずしも心理的に健康な状態を表すものではない（Block & Thomas，1955）と考えられるだろう。

3．身体像と自己受容，他者受容との関係

性別に捉えると，身体満足度得点と自己受容得点，自己受容得点と他者受容得点は男女とも相関があった。これは，先行研究の結果を支持するものである。今回問題とした，身体満足度得点と他者受容得点は男子のみ相関が認められた。

また，性別・学年別においては，1・2回生女子はいずれも相関が認められず，その他のグループについては身体満足度得点と自己受容得点において相関があった。しかし，身体満足度得点と他者受容得点においては3・4回生男子のみ相関が認められた。一方で，身体満足度得点が高い者と低い者（上位・下位群各25%）を比較すると，H群はL群より自己受容，他者受容得点とも高いことが見出された。身体満足度と他者受容の相関関係は男子において見出されたわけだが，逆に女子に認められなかったのは，何故だろうか。

「自己」が「身体」を馴染み難いものとして最も強く意識するのは，青年期と中年期においてであると思われる。中年期と異なって青年期においては「身体」がなお可能性を秘めているにもかかわらず不本意なものとして体験されるという。青年期の「自己」と「身体」とのこのような関係は，身体の変貌を希求する摂食障害や自己視線恐怖症などが好発することや心身不全感にもとづく身体症状が多発することを裏づけているように考えられる。

青年期を対象とした臨床場面では，このような自己の身体へのこだわりが病態の中心をなす症例に遭遇することが多いと思われる。青年期は自我に目覚める時期であり，親からの精神的分離，他者との優劣関係，帰属集団内での自己の存在意味などを巡る葛藤が行動症状の背景を成している。また，青年期の神経症は他者に対する自己の在り方が過度に意識され，他の年齢層よりもはるかに強く身体・行動化の側面と結びつき，その面での症状を表出することが多いと言える。例えば，対人恐怖症がその1つで，青年期に多い病態としては赤面恐怖，視線恐怖，自己臭恐怖，醜貌恐怖等がある。また，これら自己の身体に関する強迫性の苦痛と，同時にそれが他者に不快を与え，その結果として他者によって嫌われ避けられるという関係妄想確信をもつ思春期妄想症という疾病も最近注目されている。

これらは日本人特有の心性に関連があるように思われる。日本人の対人関係では，独立した個人と個人の対等な関係があるのではなく，相互の間柄によってその場が規定されるという。要求を通すためには，意見を戦わせるよりも，調和をはかり，対人関係を円滑に保つことが

重要となる。そのため直接的な言語表現よりも，気持ちを察するとか，暗に示すというかたちでコミュニケーションが行われているようである。

ところで，自己概念（self-concept）は「その人自身のパーソナリティの全体的・包括的な評価（Bruno，1986）」と言われている。そして，その自己概念の質的分析視点が自己受容の問題だと考えられている（McCandless，1970）。大学生女子を対象として，身体像（容姿，プロポーション）に対する満足度が自己の「自信」と関係しているという研究結果がある（大堀・越智，1993）が，これは，自己の外表面の身体像と自信が正の相関を示していることになり，本研究は異なる結果を見出したことになると言えよう。

秋山・藤本（1990）は「自己と身体に関する問題は，身体像を通して最ら明らかとなってくる。何故ならば身体像とは『心理的経験としての身体と関連したもの（Fisher，1963）』であり，自己像自己概念と密接な関わりをもっているからである。」と述べている。また，木村（1978）は，「自己は本来自己とは異質の存在性格をもつ身体を『所有』することにおいてしか，自己として現実に『存在』することができない」と述べている。これらのことからも，身体像と自己・他者受容とに関係があると言えよう。

今後の課題

今回，身体像・受容性を合計点で検討したが，今後は項目別にも捉えていきたいと思う。また，自己受容と他者受容において1・2回生と3・4回生とに差が見出されたことについては，その解釈が十分にできなかったので，説明概念を考慮することを課題としたい。

身体満足度については，斉藤（1985）は青年期前期における性役割意識との関連性を報告しており，また柴田は，対人行動との関連を調べた結果から，身体満足度には自己の男らしさ・女らしさに対する満足度が反映されている可能性を示唆している。身体満足度に，性別身体像が大きな影響を与えていることが推察される（柴田，野辺地，1991）。山口（1989）は，男子は自分の身体をあまり意識していない，或いは気づいていないが，女子はどこか不穏な身体を意識することが多く，またそれだけ身体に近いところにいるとも考えられると述べている。身体像は男女それぞれに固有の構造を有する（依田・野辺地，1991）と言えよう。今後は男女別に身体像の因子構造を捉えていきたいと思う。

川岸（1972）は，大学2回生男女を被験者として，自己受容，他者受容について研究した。（この研究における他者受容の測定は，被験者にとって初対面の男女2名に登場してもらっている）。同性の他者を見る時には，自己受容と他者受容は関係があるが，異性の他者を見る時には，有意な関係がみられなかったという。また，女性の場合，他者を評定する時，男性よりも自己に対する態度を反映させる傾向が強いことを見出している。単に他者受容ということでなく，他者受容の対象を異性，同性と区別して身体像との関連を研究したい。

文献

秋山俊夫・藤本晴美　1990　身体像と適応　福岡教育大学紀要第4分冊，40，193-200.

Berger，E.M. 1952 The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. Journal of Abnormal and Social Psychology，47，778-782.

フロイトS.　井村恒郎（訳）　1970　フロイド選集4　自我論　日本教文社
（Freud，S. 1923　Das Ich und das Es. Leipzig，Wien，Zurich:Intern. Psycho-analytischer Verlag.）

藤岡秀樹　1989　ボディー・イメージと自己受容性に関する研究（1）　教育心理学会第31回大会発表論文集，181.

服部智・吉田昭久・小熊均　1990　「自己受容」の基底因—実存不安との関連の分析的検討　茨城大学教育学部紀要（教育科学），39，199-216.

服部智・吉田昭久・小熊均・秋山誠一郎　1991　「自己受容」の基底因II—Acceptance of Self and Others Scaleの因子分析的検討　茨城大学教育学部紀要（教育科学），40，345-360.

服部智・吉田昭久・小熊均・秋山誠一郎　1991　「自己受容」の基底因III—「他者受容」との関連　茨城大学教育学部紀要（教育科学），40，361-377.

ホーナイK.　1973　我妻洋（訳）　ホーナイ全集2　現代の神経症的人格　誠信書房
（Horney，K. 1937 The neurotic personality of our time. W.W.Norton & Company Inc.，New York.）

伊原千晶　1992　自己及び他者に対する関わりのあり方と身体イメージとの関係についての横断的研究　京都大学教育学部紀要，38，239-253.

笠原嘉・清水將之・伊藤克彦（編）　1976　青年の精神病理1　弘文堂

川岸弘枝　1972　自己受容と他者受容に関する研究—受容測度の検討を中心として—教育心理学研究，20（3），170-178.

マズローA.H.　小口忠彦（訳）　1987　人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ　改訂新版　産業能率大学出版部
(Maslow,A.H. 1970 Motivation and Personality. 2nd ed.Harper&Row,Publishers,Inc.).

野辺地正之　1972　現代青年における自己疎外　依田・大西他（編）　現代青年　心理学講座7　現代青年の生きがい　金子書房

大堀彰・越智啓太　1993　カセクシス・スケールによる摂食障害患者のボディ・イメージ　日本教育心理学会第36回総会発表論文集，511.

大石史博　1983　Body ImageとSelf Esteem (1) —大学生の身体満足度について—日本教育心理学会第25回総会発表論文集，704-705.

岡田幸夫　1985　身体（心）像　加藤正明・保崎秀夫他（編）　増補版　精神医学事典　弘文堂　339-340.

小野国子　1987　身体意識について　京都大学教育学部紀要，33，171-181.

Phillips,E.L. 1951 Attitudes toward self and others: A brief questionnaire report. Journal of Consulting Psychology, 15, 79-81.

ロジャーズC.W.　伊東博（編訳）　1967　ロージァズ全集8　パースナリティ理論　岩崎学術出版社

Secord,P.F.,& Jourard,S.M. 1953 The appraisal of body cathexis:Body cathexis and the self. Journal of Consulting Psychology, 17 (5), 343-347.

Sheerer,E.T. 1945 An analysis of the relationship between acceptance of and respect for self and acceptance of and respect for others in ten counseling cases. Journal of Consulting Psychology, 13, 169-175.

柴田利男　1990　青年期の身体満足度が対人不安及び自己開示行動に及ぼす影響　心理学研究，61(2),123-126.

柴田利男・野辺地正之　1991　青年期の身体に対する男らしさ・女らしさの認知　教育心理学研究，39 (1),40-46.

清水將之・村上靖彦（編）　1977　青年の精神病理3　弘文堂

下山晴彦・斉藤久美子（編）　青年期後期と若い成人期　臨床心理学大系3　ライフサイクル　金子書房

Stock,D. 1949 An investigation into the interrelations between the self concept and feelings directed toward other persons. Journal of Consulting Psychology, 13, 176-180.

忠井俊明　1992　身体イメージに関する研究（その1）　京都教育大学紀要（B），81，125-137.

忠井俊明　1993　身体イメージに関する研究（その2）—イメージ描画法を用いた検討　京都教育大学紀要(B)，83，131-141.

忠井俊明・金井秀子他　1993　自己身体イメージの発達に関する検討　京都教育大学教育実践研究年報，9，25-34.

忠井俊明・金井秀子他　1994　青年期の自己身体イメージの特性に関する研究　学校保健研究，36，180-188.

高頭忠明　青年期　土居健郎・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏（編）　1987　異常心理　学講座3　人間の生涯と心理　みすず書房　168-181.

山口素子　1989　SD法による身体イメージの測定　心理臨床学研究，6 (2)，50-59.

吉田昭久・澤野有香・服部智　1992　「自己受容」の基底因Ⅳ—Berger's scale　の再検討　茨城大学教育学部紀要（教育科学），41，289-308.

Summary

The purpose of this study was to examine the following hypotheses; (1) the satisfuction of self body image shows higher score in male students than female. (2) there is positive correlation between the satisfuction of self body image and acceptance of others. (3) there are some differences of acceptance of self and others between the freshman,sophomore students and the junior,senior ones.The author used Self Rating Body Image Questionnaire (SRBI) and Acceptance of Self and Others Scale to 352 college students.The results were as follows: (1) the satisfuction of self body image showed significant difference in t-test;higher score in male students than female. (2) the students who had the high score of the satisfuction of self body image was related to the high score of acceptance of others. (3) the junior,senior students obtained higher score of acceptance of self and others than freshman,sophomore ones in t-test.